

住して前なる文どもをひろげて見けるに、露たがふことなし、其後やまひをこたりにけり、いとふしぎなり、

〔古今著聞集十六興言利口〕同御時、天皇時順徳小川瀧口定繼といふ御けしきまきぬし侍けり、四薦座にて

上薦をこして久しく奉公してけり、名月の夜、主上南殿に出御ありて、御遊ありけるに、かの定繼

が下人、くろ戸のかたの御厩のほとりに、いねぶりして候けるが、にはかにはしりたちて、中將宣

忠朝臣のあやのこうじの家へ、さかいきになりて、はしりむかひていふやうた、今内裏へ急度

まいらせ給へ、なをくきとくといひけり、中將さしもの急事何事にかとあやしう思原作候、據

一本ひて、たが奉行ぞとたづねられければ、小川瀧口殿のうけ給はらせ給ふて候といひて、やが

てはしり歸りける程に、中將あはてさはぎて、はせまいりてうかひければ、た、今なんでんに

わたらせ給ふよし女房申せば、御後のかたにてをととなふに、たぞと御たづねあれば、宣忠朝臣め

され候へるほどに、まいりたるよし申ければ、大かたさる事なければ、ふしぎに覺し召て、くはし

く御たづね有ければ、使のいひつることく、定繼が承りて、其下人にて候よし申ければ、定繼承て

相たづぬるに、はやくかの下人ねほれて、かくめしたりけるなり、あまりにはしりけるほどに、二

條あぶらのこうちを南へ原脱、據一本改、かりおりける時、築地の角にはしりあたりて、かほさきかき

てありけり、其よしを申あげければ、比興の沙汰にてやみにけり、定繼の申けるは、これは勝事に

て候、ねほれ本作ねほれ候はんからに、さる事やはつかうまつるべき、まさかさまのくせごとを

もぞ引いだし候とて、此下人をやがてつかはず成にけり、おかしき事也、

〔類聚名義抄目〕睡音碎子フル眠莫賢和メン子フリ

〔伊呂波字類抄〕人事眠子亦作冥子ムル、睡同

〔運歩色葉集〕睡子ムル、眠同

眠